東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

What do Regular Class teachers Think About Special Needs Education Coordinators?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和知, 真由, 林, 安紀子, 橋本, 創一, 平田, 美祝, 杉岡, 千宏, 李, 受眞, 大伴, 潔, 増田, 謙太郎, 澤, 隆史, 藤野, 博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173454

東京学芸大学教育実践研究　第16集　pp. 119-127，2020

通常学級の教師は特別支援教育コーディネーターについてどのように考えているか

和知　真由*・林　安紀子**・橋本　創一**・平田　美祝***・杉岡　千宏****・李　受眞****・大伴　潔**・増田　謙太郎*****・澤　隆史******・藤野　博*****

（2019年11月25日受理）

WACHI, M., HAYASHI, A., HASHIMOTO, S., HIRATA, M., SUGIOKA,C., LEE,S., OHTOMO, K., MASUDA, K., SAWA,T. and FUJINO, H.; What do Regular Class Teachers Think About Special Needs Education Coordinators?
ISSN 1349-9580

We investigated the type of problems and stresses experienced by regular classroom teachers when they conducted special needs education, how well they understood and used special needs education coordinators, and how confident or anxious they were about special needs education coordinators. Results indicated that young and veteran teachers experienced problems and stresses when teaching in special needs education classes and teaching special needs children in their class, using professional teaching methods for special needs education, as well as cooperating with family members of special needs children. Furthermore, there was a difference between young and veteran teachers in their understanding of special needs education coordinators, and in their confidence and anxiety about taking on this role. Moreover, Confident teachers had experience of special needs education.

KEY WORDS : Special Needs Education Coordinator, Special Needs Education, Regular Class

* *Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
** *Support Center for Special Needs Education and Clinical Practice on Education, Tokyo Gakugei University*
*** *Musashimurayama Fourth Elementary School*
**** *The United Graduate School of Education, Tokyo Gakugei University*
***** *Graduate School of Teaching, Tokyo Gakugei University*
****** *Department of Special Needs Education, Tokyo Gakugei University*

1．はじめに

平成24年度に文部科学省[1]によって実施された「通常学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査」において，知的発達に遅れはないものの「学習面又は行動面で著しい困難を示す」とされた児童生徒の割合は推定6.5％と発表された。このことから，通常学級における特別支援教

* 東京学芸大学大学院教育学研究科
** 東京学芸大学　特別支援教育・教育臨床サポートセンター
*** 武蔵村山市立第四小学校
**** 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
***** 東京学芸大学教職大学院教育学研究科
****** 東京学芸大学総合教育科学系特別支援科学講座

育や具体的な取り組みが課題となり，様々な取り組みが進められ，平成29年度の文部科学省による「平成29年度特別支援教育に関する調査[2]」では，国公私立小学校の校内委員会の設置の実施率は99.4％，特別支援教育コーディネーターの指名の実施率は99.3％，個別の指導計画作成の実施率は98.9％，個別の教育支援計画の作成状況は94.1％，特別支援教育に関する教員研修の受講状況は88.7％となり，制度の実施状況は高い水準となっており整備状況が進んでいることが分かる。しかし，実際に通常学級の担任がそのような制度を活用できているのか，具体的にどのように活用しているのかを明らかにする研究はまだ見受けられていない。

さらに，高田ら[3]は小学校教師の特別支援教育負担意識に関して，障害児を担任することに不安や負担を高く感じている教師は，管理職との葛藤，多忙感，同僚からの孤立や非協働性といった職場環境ストレッサーを高く感じており，心理的にも消耗し，人と距離をとっている状態であることを報告している。また，高田[4]は，ASD傾向児の担任教師は，バーンアウト傾向（情緒的消耗感・脱人格化），職場環境ストレッサー（管理職との葛藤・多忙性・非協働性）が高く，自己効力感（生徒理解）が低く，ADHD傾向児担任教師は，バーンアウト傾向（達成感の後退）が高く，障害の診断がない発達障害傾向児の場合は，典型的ではない症状や問題行動を呈するため教師が理解しにくく，周囲の教師からの理解やサポートを得にくい面があり，教師にとって大きなストレスを与える可能性を示唆している。これらの先行研究から，特別支援教育に関わる様々な要因によって，教師は精神的負担を受けていると考えられるが，具体的にどのような悩みやストレスを抱えているのかを明らかにする調査は見られていない。教師が特別支援教育に対して具体的にどのような思いや悩み・ストレスを抱えているのかを明らかにすることは，教師に対する支援や特別支援教育に関する研修を行う上で有益な情報になると考える。

また，特別支援教育コーディネーターは，学校内の関係者や福祉・医療等の関係機関との連絡調整及び保護者に対する学校の窓口として校内における特別支援教育に関するコーディネーター的な役割を担い，専門的知識やコミュニケーション能力などが必要とされる。その為，担当する教師に対して多くの負担を与えると考えられるが，校内分掌であることから，通常学級の担任も引き受けることになる可能性がある。その為，教師が特別支援教育コーディネーターについてどのぐらい知識を持っているのか，役割をどのようにとらえているか，特別支援教育コーディネーターを引き受けることについての自信・不安の有無を明らかにする必要があると考える。

また，伊藤[5]は，20，30代の若手群と40代以上のベテラン群の比較による教師のバーンアウトに関する調査を行い，若手群の方が＜達成感の後退＞をより強く感じていると述べている。さらに，ベテラン教師の方が授業指導を重視し，授業指導に対する自己評価が高く，多忙感や加齢による健康上の悩みはあるものの，教師としての中核的な悩みを持つ者が比較的少なかったが，若手教師は子どもとの関わりを重視する一方で，教科指導や生徒との関わりという毎日の教育活動の中で悩みを抱えるものが多いと報告している。これらのことから，教師としての経験年数による経験や着眼点の差が教師の指導や悩みに大きく影響している可能性が考えられる。そのため，特別支援教育に関する悩みやストレス，特別支援教育コーディネーターに関する知識や活用に関して，経験年数に応じて比較検討することは，教師をより理解し支援していく上でとても有効であると言える。そのため，本研究では通常学級の担任を務める若手教師・ベテラン教師を対象に調査を行い，それぞれの群の特別支援教育に関する悩み・ストレス，特別支援教育コーディネーターのとらえ方や活用の仕方，引き受けることについての自信・不安等を明らかにすることを目的とした。

２．方法

２．１　対象

関東の公立小学校の若手教師・ベテラン教師各500名に回答を依頼した。若手教師は教師歴１～５年の教師に任意で回答を依頼し，該当者がいない場合は教師歴10年以内の教師に回答を依頼した。同様に，ベテラン教師は教師歴30年以上の教師に回答を依頼し，該当者がいない場合は教師歴15年以上の教師に任意で回答を依頼した。

２．２　手続き

201X年７～８月頃に質問紙を若手教師用・ベテラン教師用を１セットとして郵送にて各学校に送付した。また，無記名で回答し，返信の際は質問紙と同封した封筒にて回答者が各自で返信を投函するよう依頼した。依頼文では，任意で回答を求めることや調査結果はプライバシーに関することを固く厳守し統計的に処理するため校名や特定の児童生徒や教師に関する情報は公表しないこと，データ分析後調査用紙は責任をもって廃棄すること等を説明し，質問紙に同封した。

その後，約１か月かけて質問紙を回収し，若手教師203名（回収率40.6％），ベテラン教師209名（回収率41.8％）の回答を回収した。

２．３　調査内容

質問紙の主な調査項目は以下の通りである。

1．回答者の特性：教師歴，特別支援学校の免許の有無，特別支援学級担任経験の有無など
2．特別支援教育に関する研修への参加の有無
3．特別支援教育に関する悩み・困難さについて：（計29項目から複数回答）
4．特別支援教育コーディネーターに関して：具体的な役割・働きについての知識（５件法），必要性認識（５件法），活用状況（計12項目から複数回答），自身がコーディネーターに指名されることへの自信・不安（５件法・理由は記述）

３．結果

３．１　回答者の特性について

（1）教師歴

若手教師群・ベテラン教師群の教師歴は，若手教師群の平均は3.7年，ベテラン教師群の平均は27.8年であった。

（2）特別支援学校教諭免許状保有の有無

若手教師群の「特別支援学校の免許有」の人数は11名（5.4％），「特別支援学校の免許無」の人数は183名（90.1％），「特別支援学校の免許の取得を検討中」の人数は８名（3.9％）であり，若手教師群の中では「特別支援学校の免許無」の回答者が最も多かった。

ベテラン教師群の「特別支援学校の免許有」の人数は９名（4.3％），「特別支援学校の免許無」の人数は194名（92.8％），「特別支援学校の免許の取得を検討中」の人数は４名（1.9％）であり，ベテラン教師群も「特別支援学校の免許無」の回答者が最も多かった。

若手教師群とベテラン教師群とでは，若手教師群の方が特別支援学校教諭免許状保有者は多かった。

（3）特別支援学級担任経験の有無

若手教師群の「特別支援学級担任経験有」の人数は19名（9.4％），「特別支援学級担任経験無」の人数は181名（89.2％），「その他」の人数は３名（1.5％）であった。「その他」は，支援員や介助員の経験があると答えた回答者が存在した。若手教師群の中では「特別支援学級担任経験無」の回答者が最も多かった。

ベテラン教師群の「特別支援学級担任経験有」の人数は36名（17.2％），「特別支援学級担任経験無」の人数は170名（81.3％），「その他」の人数は３名（1.4％）であった。「その他」の内訳としては，支援員や介助員，肢体不自由児の特別支援学校での勤務経験がある回答者が存在した。ベテラン教師群においても，「特別支援学級担任経験無」の回答者が最も多かった。

若手教師群とベテラン教師群を比較すると，ベテラン教師群の方が「特別支援学級担任経験有」の回答者が多かった。

３．２　特別支援教育に関する研修への参加の有無

若手教師群の「特別支援教育に関する研修への積極的な参加無」の人数は148名（72.9％），「特別支援教育に関する研修への積極的な参加有」の人数は55名（27.1％）であった。若手教師群の中では「特別支援教育に関する研修への積極的な参加無」の回答者が多かった。

ベテラン教師群の「特別支援教育に関する研修への積極的な参加無」の人数は118名（56.4％），「特別支援教育に関する研修への積極的な参加有」の人数は91名（43.5％）であった。ベテラン教師群でも「特別支援教育に関する研修への積極的な参加無」の回答者が多かった。

若手教師群とベテラン教師群を比較すると，ベテラン教師群の方が，「特別支援教育に関する研修への積極的な参加有」の人数が多かった。

３．３　特別支援教育に関する悩み・困難さについて

特別支援教育に関する悩み・困難さに関して，「①集団の指導に関する悩み・ストレス」10項目，「②個の指導に関する悩み・ストレス」７項目，「③学校内の連携に関する悩み・ストレス」４項目，「④学校外の専門機関・家庭との連携に関する悩み・ストレス」４項目，「⑤特別支援教育等の専門知識に関する悩み・ストレス」４項目の合計29項目から回答者に当てはまる特別支援教育に関する悩み・ストレスへの回答を依頼した。

若手教師群とベテラン教師群の各項目における回答はFigure１～５のようになった。

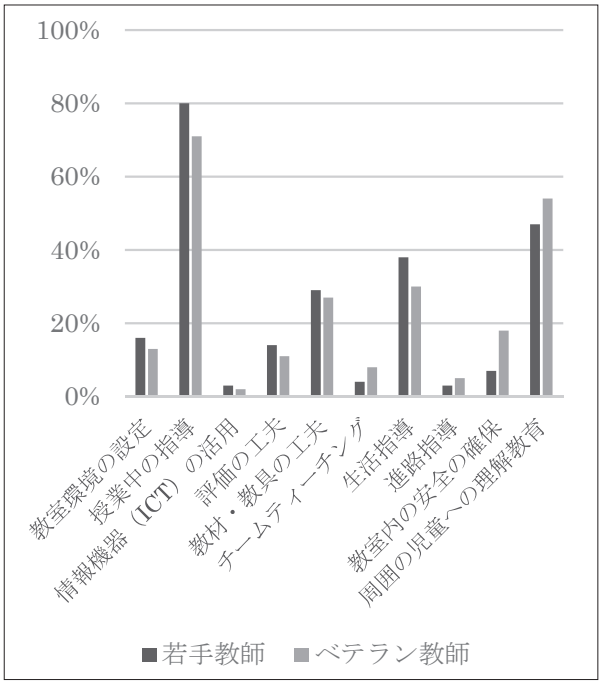

Figure1　①集団の指導に関する悩み・ストレス

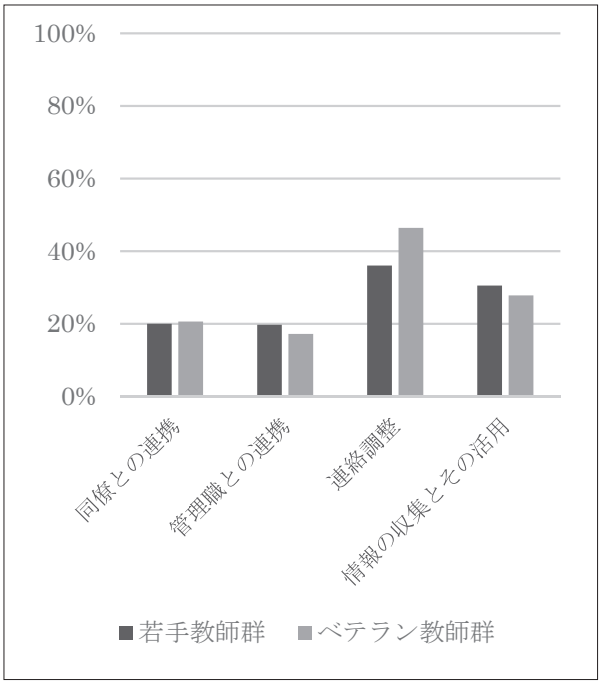

Figure3　③学校内の連携に関する悩み・ストレス

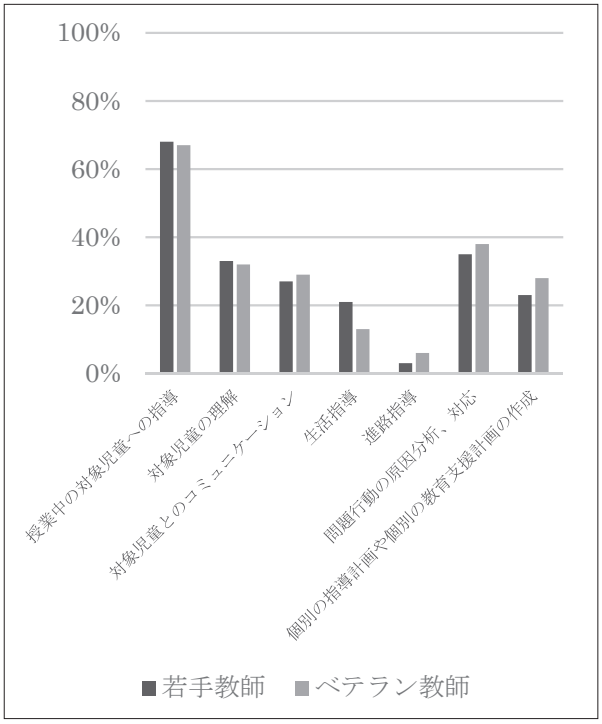

Figure2　②個の指導に関する悩み・ストレス

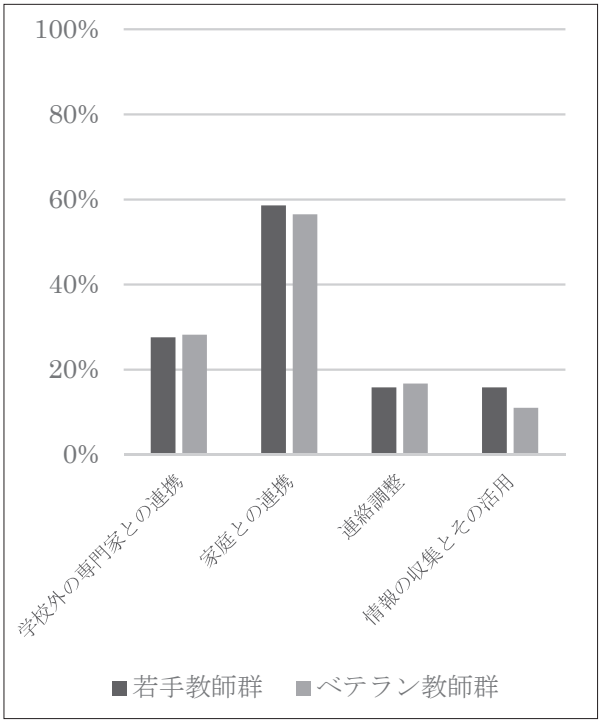

Figure4　④学校外の専門機関・家庭との連携に関する悩み・ストレス

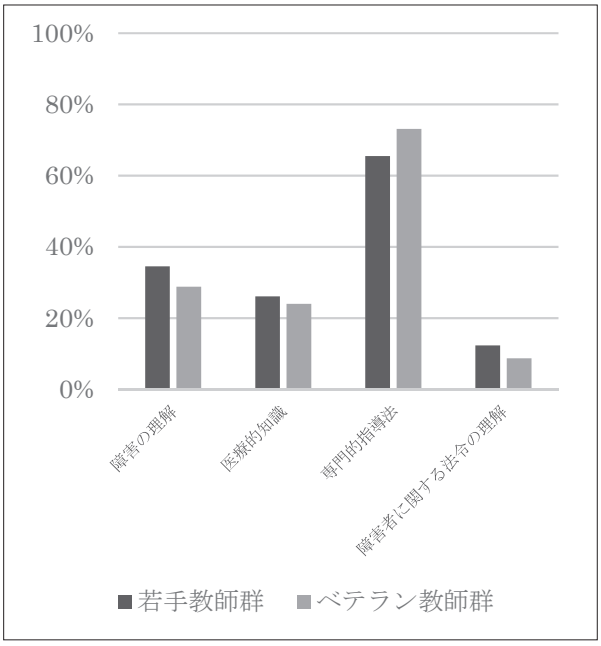

Figure5　⑤特別支援教育等の専門知識に関する悩み・ストレス

若手教師群では，「①集団の指導に関する悩み・ストレス」の「b.授業中の指導」と回答した教師が最も多かった（163名，80.3%）。次いで「②個の指導に関する悩み・ストレス」の「a.授業中の対象児童への指導」（137名，67.5%），「⑤特別支援教育の専門知識に関する悩み・ストレス」の「c.専門的指導法」（133名，65.5%），「④学校外の専門機関・家庭との連携に関する悩み・ストレス」の「b.家庭との連携」（119名，58.6%）であった。

ベテラン教師群では，「⑤特別支援教育などの専門知識に関すること」の「c.専門的指導法」に関する悩み・ストレスのある回答者が最も多かった（152名，72.7%）。次いで，「①集団の指導に関すること」の「b.授業中の指導」（148名，70.8%），「②個の指導に関する悩み・ストレス」の「a.授業中の対象児童への指導」（139名，66.5%），「④学校外の専門機関・家庭との連携に関する悩み・ストレス」の「b.家庭との連携」（118名，56.5%），「①集団の指導に関すること」の「j.周囲の児童への理解教育」（113名，54.1%）と回答したものが半数以上存在した。

若手教師群・ベテラン教師群を比較してみてみると，両群共に，「①集団の指導に関すること」の「b.授業中の指導」と「②個の指導に関する悩み・ストレス」の「a.授業中の対象児童への指導」，「⑤特別支援教育などの専門知識に関すること」の「c.専門的指導法」，「④学校外の専門機関・家庭との連携に関する悩み・ストレス」の「b.家庭との連携」に関する悩み・ストレスに関して回答したものが多い点が共通していた。一方で，若手教師の方がベテラン教師と比べて「指導」に関して悩み・ストレスを抱えていることや，ベテラン教師の方が「チームティーチング」や「安全確保」，学校内の「連絡調整」，「専門的指導法」に関する悩み・ストレスが大きいことも明らかになった。

３．４　特別支援教育コーディネーターに関して

３．４．１　特別支援教育コーディネーターに関する知識について

特別支援教育コーディネーターの具体的な役割・働きをどの程度知っているかを「1：全く知らない」～「5：よく知っている」から最も当てはまるものを１つ選んで回答を求めた。若手教師群・ベテラン教師群両群の回答は以下のFigure6，７のようになった。

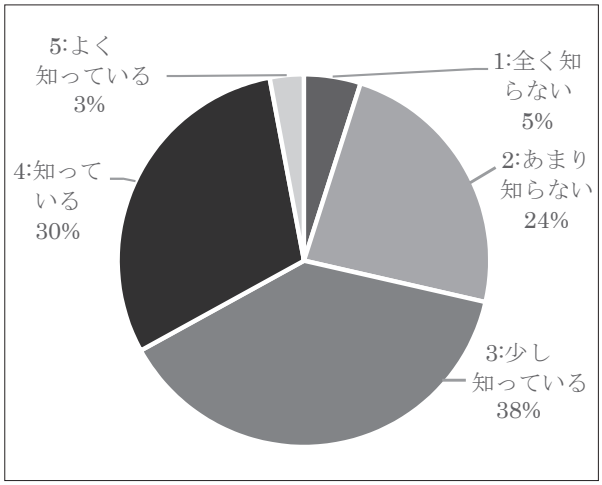

Figure6　若手教師群の特別支援教育コーディネーターの理解度

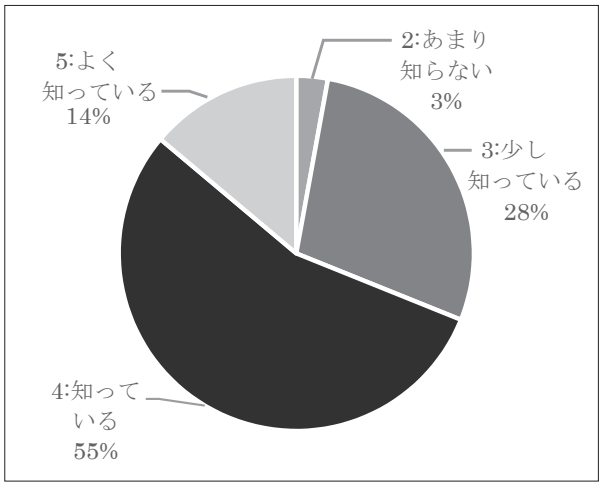

Figure7　ベテラン教師群の特別支援教育コーディネーターの理解度

若手教師群では「3：少し知っている」，ベテラン教師

群は「4：知っている」と回答した教師が最も多かった。また，ベテラン教師群では「1：全く知らない」と回答した者はいなかった。若手教師群とベテラン教師群を比較すると，ベテラン教師群の方が「知っている」と回答した人数が多かった。

３．４．２　特別支援教育コーディネーターの役割や働きへの必要性について

特別支援教育コーディネーターの役割・働きにどの程度必要性を感じているかを「1：必要ない」～「5：とても必要だ」から最も当てはまるものを１つ選んで回答を求めた。若手教師群・ベテラン教師群両群の回答は以下のFigure8，9のようになった。

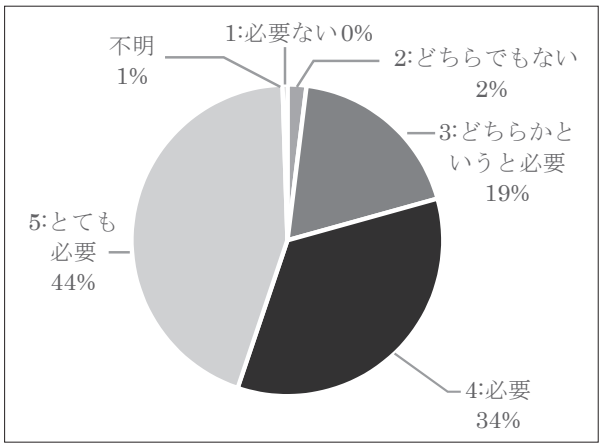

Figure8　若手教師群の特別支援教育コーディネーターに対する必要性

若手教師群では「5．とても必要だ」が90名（44.3%）で回答者が最も多かった。

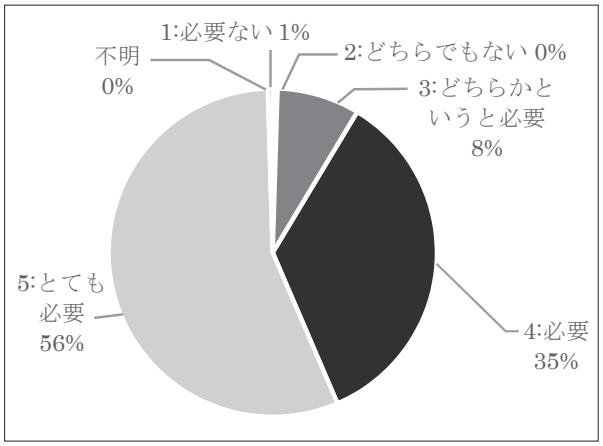

Figure9　ベテラン教師群の特別支援教育コーディネーターに対する必要性

ベテラン教師群でも「5．とても必要だ」が117名（56.0%）で回答者が最も多かった。

また，両群共に「必要だ」（「3：どちらかというと必要」～「5：とても必要」）と回答した人数は「必要でない」と回答した人数よりも多かった。

３．４．３　特別支援教育コーディネーターの活用について

回答者がコーディネーターに過去または現在，支援を受けているか，「1：全く受けていない」「2：ほぼ受けていない」「3：時々受けている」「4：継続的に受けている」「X：受け方がわからない」の中で最も当てはまるもの一つを選択し，回答を求めた。

若手教師群では「3：時々受けている」が107名（52.7%）で最も多かった。ベテラン教師群も同様に「3．時々受けている」が122名（58.4%）で最も多かった。また，若手教師群では「X：受け方がわからない」と回答した教師が19名（9.4%）存在したが，ベテラン教師群では回答した者はいなかった。

特別支援教育コーディネーターの活用方法としては，「指導についての助言・情報提供」，「話を聞いてもらう・相談する」，「学校外の専門機関との連絡・調整」が両群共に多かった。

３．４．４　特別支援教育コーディネーターを引き受けることへの自信・不安

回答者が特別支援教育コーディネーターに指名された際に引き受けることについての自信・不安を「5：とても自信がある」～「1：全く自信がない」／「5：とても不安がある」～「1：全く不安がない」でそれぞれ最も当てはまるものに対して回答を求めた。両群の自信についてはFigure10，11，不安についてはFigure12，13のようになった。

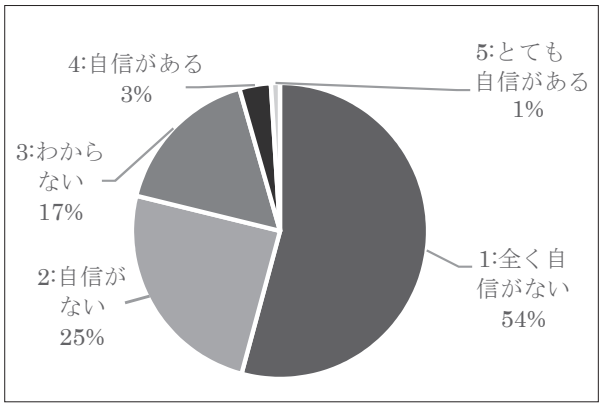

Figure10　若手教師群の特別支援教育コーディネーターを引き受ける自信

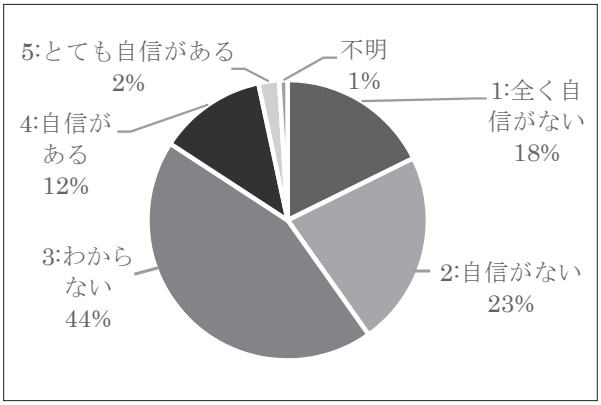

Figure11　ベテラン教師群の特別支援教育コーディネーターを引き受ける自信

若手教師群は引き受ける自信は「1：全く自信がない」が最も多く（110名，54.2%），「自信がない」回答者が多くを占めているのに対し，ベテラン教師群は「3：わからない」が最も多く（92名，44.0%），「3：わからない」もしくは「自信がある」と回答した者が半数以上を占めていた。

若手教師群では「自信がある」と回答した者は少なかったが，自信があると回答した者の中には，「大学時に学んだ知識（特別支援教育）を活かせると考えるため」，「特別支援学級と通常学級の両方の担任経験があるため」，「経験のある先生方に相談すれば行えると思う」という経験に関する記述が見られた。

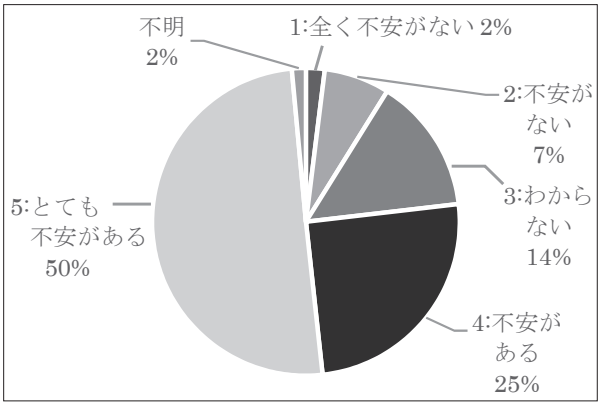

Figure12　若手教師群の特別支援教育コーディネーターを引き受ける不安

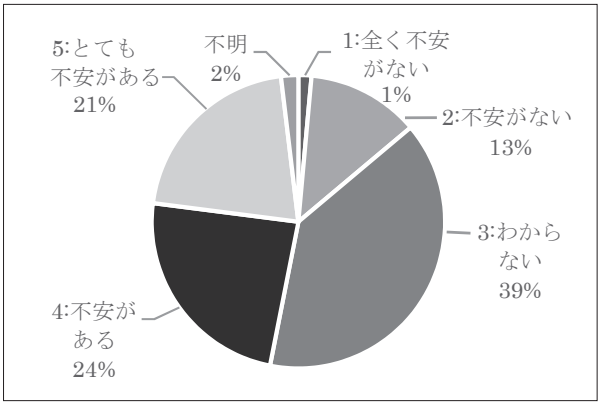

Figure13　ベテラン教師群の特別支援教育コーディネーターを引き受ける不安

一方，不安に関しては，若手教師群では「5：とても不安がある」が最も多く，102名（50.2%）であった。ベテラン教師群「3：わからない」が最も多く，82名（39.2%）であった。どのような不安があるのか自由記述で回答を求めたところ，両群共に，「特別支援教育の専門的な知識や経験，技能がないため，保護者対応や教師への適切な助言・情報提供ができるか不安である」といった回答や，「担任の仕事との兼務による負担の大きさ」を挙げている教師が多かった。

また，特別支援教育コーディネーターを引き受けることへの自信・不安を，特別支援教育の研修の受講の有無と結び付けてみていくと，若手教師群ベテラン教師群共に，特別支援教育の研修を受けたことのある教師は，受けていない教師と比べて「5：とても自信がある」「4：自信がある」と回答した教師が多かったものの，受講していても「2：自信がない」「1：全く自信がない」と回答した教師も一定数存在した。不安に関しては，若手教師群では受講の有無に関係なく，「5：とても不安がある」と回答した教師が多く，ベテラン教師群では受講の有無に関係なく「3：わからない」が共に多かったが，次いで「5：とても不安がある」「4：不安がある」と回答した教師が多かった。

4．考察

4．1　特別支援教育に対する悩み・困難さについて

若手教師群・ベテラン教師群，両群共に集団の指導での「授業中の指導」，個の指導での「授業中の対象児童への指導」，特別支援教育などの専門知識の中の「専門的指導法」，学校外の専門機関・家庭との連携の中の「家庭との連携」に対して，悩みやストレスを感じている教師が多いことが共通していた。担任の教師をサポートする際に，特別支援教育コーディネーターは，「指導法」に

関して助言や情報提供ができるような知識・技能を有することによって，通常学級の教師の悩みや困難さを軽減できるのではないかと考える。

４．２　特別支援教育コーディネーターに関する知識・活用状況について

若手教師群・ベテラン教師群共に特別支援教育コーディネーターの具体的な役割・働きを「知っている」と回答した者が多く，特別支援教育コーディネーターに対する必要性も両群共に高かった。また，ベテラン教師群の方が若手教師群よりも特別支援教育コーディネーターの具体的な役割・働きを知っている割合が高かった。しかし，若手教師の中には，特別支援教育コーディネーターの活用の仕方が分からないといった意見も見られたため，役割や働きについて十分に説明を受けていない可能性があり，改善すべき問題であると考える。

管理職やベテラン教師から若手教師に対して特別支援教育コーディネーターの活用の方法を伝えたり，活用しやすい環境を学校全体で整えたりする必要があると考える。

また，活用状況に関しては，両群共に，時々や継続的に活用していると回答した者が多く，両群共に同程度の教師が特別支援教育コーディネーターから支援を受けていることが明らかになった。しかし，活用率が100％ではなかったことから，支援を必要とする教師が支援を必要な際に確実に受けられるよう，特別支援教育コーディネーターの人数を増やすといった取り組みも効果的ではないかと考える。

４．３　特別支援教育コーディネーターを引き受ける際の自信・不安

特別支援教育コーディネーターを引き受ける自信については，若手教師群は「1：全く自信がない」が最も多かったが，ベテラン教師群は「3：わからない」が最も多かった。また，両群を比較すると，ベテラン教師群の方が若手教師群よりも特別支援教育コーディネーターを引き受ける自信が高いことが明らかになった。「自信がある」と回答した教師は，両群共に少なかったが，自信がある教師は特別支援教育の経験や知識があることが自信につながっていることが回答から明らかになった。長谷部ら[6]は20～29歳のコーディネーターや教職経験年数１～９年のコーディネーターは，他の者よりも役割曖昧（「今もっている知識や技術では，とてもたち打ちできない」，「仕事の中で，何をしたらよいのかはっきりしない」など）得点が高く，通常学級の担任を兼務しているコーディネーターも，その他の者より役割曖昧得点が高いと報告しており，一方で，特別支援学級の担任経験を有するコーディネーターは，その他の者より役割曖昧得点が低いと述べている。特別支援教育に関わる経験の差が特別支援教育コーディネーターとしての役割をどこまで求められているかを判断することに大きく影響していると考えられる。

特別支援教育コーディネーターを引き受ける不安については，若手教師群では「5：とても不安がある」が最も多く，ベテラン教師群「3：わからない」が最も多かった。不安に思う理由として，両群共に，「特別支援教育の専門的な知識や経験，技能がないため，保護者対応や教師への適切な助言・情報提供ができるか不安である」といった回答や，「担任の仕事との兼務による負担の大きさ」を挙げる教師が多かった。さらに，特別支援教育に関する研修の受講の有無に関わらず，引き受けることに対して不安に感じている教師が多かったことから，教師たちが求めるニーズに当てはまる研修を受けることができていないことが考えられる。その為，特別支援教育における研修では，より具体的で実践的な内容を取り扱う必要があると考える。

注）本研究は，令和元年度（H31）教育研究活動（取組）：現職教員に対する次世代育成教育の研修の「特別支援教育に関わる大学発信型現職教員研修システムの開発」によるプロジェクト研究の一環である。

文献

1）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：平成24年12月５日　通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
2）文部科学省：平成30年３月29日　平成29年度特別支援教育体制整備状況調査結果について
3）高田　純・中岡　千幸・黄　正国：小学校教師の特別支援教育負担意識とメンタルヘルス要因，広島大学心理学研究，11，241-248，2011.
4）高田　純：発達障害傾向のある児童を担任する種学校教師の支援　障害種とメンタルヘルス関連要因，学校改善研究紀要，1-5，2019.
5）伊藤　美奈子：教師のバーンアウト傾向を規定する諸要因に関する探索的研究―経験年数・教育観タイプに注目して―，教育心理学研究，48，12-20，2000.
6）長谷部　慶章・阿部　博子・中村　真理：小・中学校における特別支援教育コーディネーターの役割ス

トレスに関連する要因，特殊教育学研究，49（5），
457-467，2012.